



周産期母子医療センターの 早期再開と産婦人科医師の拡充 ～子供を産み育てる環境の早期改善を！～



小樽・後志で唯一の「地域周産期母子医療センター」に指定されている北海道社会事業協会小樽病院（以下、小樽協会病院）は平成26年11月から新規の分娩受付を休止しています。

小樽協会病院は、地域周産期母子医療センターとして、平成13年10月に指定されて以来、周産期を対象とした産科医療の要としての重責を担ってきました。

しかし、産科医や助産師の確保が極めて難しく、現在まで休止の状態が続いています。

その結果、小樽で出産できる病院が1カ所のみで、市民、特に妊婦

や里帰り出産を希望する家族の不安が急速に高まっています。

我々の小樽市で、出産できる産婦人科の病院が限られることは、出生率の低下や少子高齢化、人口減少を加速させる要因につながり、子育て環境や教育面にも影響を及ぼします。市民一人一人が真剣に考えていかなければならない大きな問題です。

全道では、認定を受けている地域周産期母子医療センターが30施設あり、このうち4施設が休止しています。

（H29・9現在）

産婦人科医師の不足は 小樽にどう影響するの？

市内では約20年前に9つの診療機関で分娩ができましたが、産婦人科医師の高齢化などにより年々減少し、現在は1カ所のみです。

小樽市在住で今年、市外の産婦人科でお子様を無事出産された方にお話を聞きました。

「出産時に何かあった場合、手稲区の病院に搬送されると聞いていたので、それであれば最初からその病院に通院する方が安心だと思いました。ただ、小樽からの通院

なぜ産婦人科の医師が少ないの？

産婦人科医師の減少・不足の原因は、過酷な勤務や訴訟率の高さと平成22年度の臨床研修科目制度の改定により、産婦人科が必修科目から選択科目となったことも大きく影響していると思われます。

勤務時間が不規則で体力も必要となる産婦人科医師は、60歳をめぐりに一線を退くケースもあり、医師の高齢化によって分娩施設数が減少

しているということも一因にあるようです。

しかし、一番の問題は、産婦人科医師を目指す若手の育成が進んでいないということに難しさがあるのではないのでしょうか。

産婦人科医師は勤務の過酷さに加え、慢性的な医師不足により1人にかかる負担が大きく、訴訟のリスクなどを考え、産婦人科医師になるのを躊躇する若手が少なくないようです。

産婦人科医師の減少は、地方都市において大きな問題です。産婦人科医師が増えるよう、医療現場には、医学部の学生教育や臨床研修など、積極的な産婦人科医師の養成を期待したいところです。

北海道における 周産期医療体制の整備

北海道では、ハイリスク児、ハイリスク分娩などに対する周産期医療体制を整備するため、平成13年に策定した「北海道周産期医療システム整備計画」に即して周産期医療を取り巻く環境の変化に合わせ改定を重ねながら、平成23年3月に「北海道周産期医療体制整

